



初冬の阿蘇中岳

山は眠る。阿蘇の山は眠る。
落ち葉散り敷き、夏には青々とピ
ロードの光を放つ草も浅黄色に変わ
る。

枯れゆく草の

うつくしさにすわる
あてのない放浪の旅の途上で、枯れ
草さえもいとおんだ詩人がいる。

種田山頭火。無季、無定型の自由
律俳人。山口の生まれ。大正五年、
熊本市で額縁屋「雅楽多」を営むが、
妻子を捨て東京へ。その後熊本へ戻
り、大正十四年出家。堂守となった
寺は植木町の味取観音堂。熊本とは
因縁浅からぬ人だ。大正十五年、鉄
鉢一つ持ち、「解くすべもない惑ひ
を背負うて」（句集「鉢の子」）托
鉢の旅に出た。

すすきのひかり

さへぎるものなし

阿蘇町内牧、宿屋の庭に、山頭火
の句碑が刻まれている。大観峰の眺
めだという。晩秋の、透明な日を受
けてきらめく、薄、ススキ、すすき…

けふもいちにち

風をあるいてきた

とつぷやく山頭火

その瞳に映るのは、木枯らしに蒼冷
めた霜枯れの山道だろうか。道は、
彼の生きてきた日々にも似て、果て
しなく、あてどなく続く…

何より自然にひかれ、自然の中で
生きた山頭火。心に草原をわたる風
を住ませた山頭火。

モノに満ちた心にも、住まわせて
おきたい。阿蘇の山肌の一部でも、
清水のひとしづくでも。

季節の風が住んでいた